

明治三十一年十二月二十六日 禮拜三 第三種郵便物認可

明治三十四年二月一日 發行

每月二回（一日、十五日）發行

社説
◎娼妓の賦金を廢止すべし

論説

◎來るべき道德と宗教

◎天下悉く小人也

社會

◎英國女皇陛下の崩御◎京濱佛教徒大懇話會◎暗黒かる東京市◎伊藤圭介翁逝く
◎眞宗各派同盟會俱樂部◎公德問題◎教界彙報

在大學

八木光貫
安藤鐵腸

改教時報

第四十八號

信界

◎何ぞ心主を求めざる

令音

興地觀圓

◎新山吹譚

會報

（文學士）

甲南生

◎島嶼（國歌紀念式歌況）

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

娼妓の賦金を廢止すべし

國家は個人若くは團體等に向て不道徳を行ふを認許するの權利ありや、如何に國家の權利は絕對的にして無上なりといふとも、余輩は此間に向て然りと答ふる能はざるなり、若し不道徳を行ふを許すの權ありと言はば、殺人、盜竊、詐僞取財其他あらゆる罪惡の行爲を私人に向て公許し得るに至るべし之れ豈國家至當の權利といふべけんや、斯る極端の例を以て論ずる時は、國家は不道徳を行ふを許すの權なきは自明の理なるが如く見ゆれども、此權なきとせば又一方に矛盾を生ずる觀なしとせず、例せば國家が公娼を許する如きは、若し賣淫なるもの不道徳の行爲とせば國家は不道徳の行爲を許可するにあらざるや、然れば茲に國家と雖も不道徳の行爲を許可するを得ずとの理論と相衝突するをみるなり、此點に就いて余輩は左の如き理由ありと信ず、法律の不備なる間隙に乗じて巧に法網を潜り、苟も免れて耻なきものにあらざる以上は、公然法律が認許せる即適法の行爲は、如何なる行爲と雖も、之を直に不道徳と呼ぶ能はざるなり、固より不道徳にあらずといふも道徳的行爲なりといふにあらず、道徳的にあらずと雖も、罪惡にあらざる行爲は、世に何程も存在し得るなり、佛教に之を無記といふ、かの公娼制度の如きは或る時

と場合に於ては、此無記の行爲たるを得るものなり、今更新しく言ふまでもなく、人は何處までも人にして、神佛にもあらず又天魔波旬にもあざれば、失行缺點無き能はざるは、猶善行美言なき能はざるが如し、其人を分子として組成せられたる社會には、亦善美なる行爲と醜汚なる行爲と平行雜糅するは惟むに足らざるなり、然れば家に塵捨場の必要なるが如く、社會にも汚行の溜場を設置せんとしめは決して一理なきにあらず、密賣淫制度といひ得べくんば、と公娼制度と絕對的に利害得失を論せば其優劣俄に軒輊すべからざるものあらん、然れども余輩は斷信す、公娼制度を無記の行爲寧ろ得策なりとせしめしは過去の事あり、何となれば大凡道徳の觀念なる者は世と推し移るものにして、極端なる純善と大惡ととは固より古今東西を通じて、其評價に差異なかるべく、人を救済する行爲の如きは世界到る處之を善行美事と認むべく、殺人盜竊の如きは古今を通じて惡行たるに相違あらざるべしと雖も、其中間の行爲に至りては、社會の狀態、人智の進程等に由りて道徳觀念轉移するものなり、古には殉死復讐等を以て善行とせし時代もあらしなり、公娼制度の如きも、社會の殆ど全般が認めて必要として、敢て之を不道徳なりともせず、又人身賣買を以て不道徳にして、人道に背反する行爲たる事をも知らず、公罰を以て寧ろ良制得策なりと信じたる間は、少くとも止むを得ざるに出づる必要の制度として恠まざりし間は、娼妓の公許は決して醜事にあらず、其營業者も決して醜業にあらざるなり、然るに今日は昔日と大に事情を

○政教時報第四十七號目次

- 社 說 風紀の振肅 ●公德の策勵
論 說 如何にして信仰を求むべきか 今井昇道
社 會 元勳老いたり ●二十世紀の歴史等
雜 錄 浩々洞の新年 ●元旦の獨語 百木劍虹
信 界 ●紅葉狩 (太田吾風)
友に與へて不滅の信仰を論ずるの書
文學士 (眞岡湛海)

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
東京市本郷森川町一番地
明治三十四年一月廿一日印刷
明治三十四年二月一日發行
發行兼編輯人 上村幸三
印刷 清水朝太郎

異に於るものあり、世界の文明國を見るに、決して日本の如き制度を取れる國は存せざるなり、對絶的の利害得失は兎も角、斯る事柄に惟り異を立て奇を喜ぶには及ばざるなり、早く世間通途の義に準じて、世界の廣き考に従ふこそ君子國の所爲と云ふべけれ、一切萬事歐米の模倣を勉むるにも當らざれども、公娼制度の如きは、人身買賣を是認せし時代の遺風にして、決して我國の國粹にもあらざれば長所と誇るべきにもあらざれば、斯る習風を維持して異を立て、各國人より未開視せらるゝは愚の極といふべし、此點に於て余輩は斷然廢娼を主張するものなり、又我國内の社會上の状態より考察するも輿論は昔日と異にして、公娼制度を攻撃する者多く、存娼論を唱ふる者と雖も、猶公娼を置くは人道的なりと斷言する者なきは、之れ日本の道德觀念漸く轉進して、公娼制度を以て醜陋なりと自覺せるなり、社會已に醜陋なりと自覺するに至らば何ぞ之を存置するの必要あらん、余輩は此點に於て廢娼論に左袒するものなり、今暫く見地を他に轉せば、社會已に公娼を醜陋なりと不道德なりと認むる上は、國家は此より賦税を徴して之を公許するの權あるべからざるなり、不道德と認めて而も之を公許するは自殺的行為にして而も弄權の譏免るべからず、余輩は是に於てか娼妓の賦金を徴するを非として其廢止を主張するなり、若し娼妓の賦税徴征を以て自殺行為にもあらず、又越權の沙汰にもあらずとするも、斯る醜業者より征稅して國家の歳入を補ふは(假令地方税にても國家より之を認許するなり)國家自身の耻辱にあらざや、

と雖も、又一方には新に娼妓となる者も多くして、是等新娼雇入に關しては、其證書は従前の如く人身を抵當にする如き書さ方は、彼等樓主輩は人道よりも德義よりも、自身等の利害上よりして之を爲さざれば、名稱上には人身買賣の如き陋風除かれたりとも雖も、其實は全く従前と體風の行はるゝ事は同一にして、且公娼は依然として存するを以て、社會に害毒を流す事減せず、歐米人に體風と笑はるゝ事は曾て異なるなきなり、國家の体面を損し、他に輕蔑せらるゝ、愚も亦極れり、而して此痼態を演ずる間も盡期なからんとするに至ては、余輩の堪ふる所ならんや、故に曰く娼妓の賦金を廢止すべし、同時に遊廓に大に制限を加ふべし、

論 說

來るべき道德と宗教

八木光貫

甚矣、方今世道人心の愈々腐敗墮落せる熱々社會の現状を大觀すれば、其政治界と云はず教育界と云はず、將た宗教界と云はず、陽には同情慈善の假面を裝ふて、陰には利己我慾の行為を逞ふするの徒鮮しとせず、之れが爲めに優者は劣者の膏血を絞る、強者は弱者の肉を以て己の腹を肥やし、往々悲酸なる修羅道をさへも演ずる事あるにあらずや、活き馬の眼を抜く位は何んでもなき業となれり、嗚呼社會は暗黒なり、

去れば内務省が娼妓の口廢業を許すや最善し、然れども之と同時に彼等の賦税を廢止せらるべき理なり、而して政府も之を令せず、府縣も之を議せざるは已に恠むべし、更に最も恠むべきは世の論客就中人道鼓吹論者廢娼主娼者にして之を言ふ者無き事なり、若し夫賦金だに廢止せらるれば、茲に娼妓の公許は廢せらるゝなり、假令彼れ賣娼を業とする如き徒の廓を成して群居するも是賦許に外ならざればなり、彼等の群散を以て決して公私を區別す可らざるなり、是に至れば、彼等營業者も大に謹慎するに至るべきなり、已に私娼といひ、點許となれば假令群を爲すも廓を爲すも、世間を懼りて狂歌の聲天地を振動せしむる如き傍若無人の大騷を爲すを得ざるべし、彼等の謹慎は必ずべからずとするも、政府は之を制抑し得るなり、斯くの如きに至らば遊廓なる者は唯一種的情慾を充たす場所となり、世に害毒を流す事も今日の如く甚しきに至らざるなり、聞く獨乙邊に存する娼婦は斯くの如きものなりと、之を公と呼ばんか私と名けんか、名稱は何れにしても餘輩の關する所にあらざれば、人々の自由に任すべし、斯くの如くして檢束をも爲すべし、斯くの如くして娼婦の存在をも默認すべし、然る時は一夕の豪遊に千金を失ふの愚は爲さんと欲するも、その處を得ず、遊蕩兒か巨萬の富を井月にして蕩盡するの憂も殆ど除去せらるゝを得ん、以て歐米各國に對しても所謂世間通途の義に準ずるを得て公娼制度の害惡は除かれ國家の体裁も飾られたる譯にあらざや、然らざれば自由廢業は許されて、娼妓の廢業する者日に月に之れ有り

シヨッペンハッエルが嘗て之を悲嘆の谷と評したるは其一方面を視たる眞理あり、今や第十九世紀は過去の歴史となり終はりぬ、物質的文化は暖々として日に月に發達進歩すと雖、精神的修養は遅々として進まず、道德の如き寧ろ前者の轉比例をなして退くの感あり、豈に悲からずや、今世の人に或は社會的事業と云ひ、或は慈善事業と云ふて、口には大言壯語すど雖、其實己が名利に趨逸して、德義の何たるを解する能はざるものは、是れ他なし、道德に於ては寂然不動の主義なく、宗教に於ては堅牢不拔の信仰なき所以なり、此の主義此の信仰なきの故を以て、社會の人心は唯々飄々として浮萍の水上に漂ふが如く、今日は向ふの岸に咲く賤業婦の如く、旗色を見て其去就を決する匹夫の如く、淺間しき根情が世上幾多の精神を腐蝕せしむるの止むを得ざるに至るとは、有志の士、豈に慨然たらざらんや。

回顧すれば、輓近の道德主義として、最も歐米の人心を風靡せるは、彼のベンサム、ミル等の主張したる功利主義是れなり、此の主義か唯物論と共に、明治の初年に於て一たび我邦に輸入せられ、翻譯により著述によりて、社會一般に紹介せられてより、我邦の人心は滔々として之れに向ひ、殆んど其底止する處を知らず、井上博士嘗て此の學説を評すらく、功利主義は凡俗の耳朶に入り易く、常識の能く了解し得る處なりと雖、遂には人をして邪道に迷はしむる最も危険なるものなり、蓋し功利主義は最大幸福の最大幸福を主意とする道德主義なれば、其看板は甚だ美なりと雖、是れ恰も羊頭を掲げて

狗肉を賣るものなり、何者、最大敷の最大幸福と云ふが如き
 漠然たる事項は、實踐道德に疎し、實踐躬行に迂濶なる道
 徳主義は完全なる道德主義と云ふべからず、又功利主義は世
 渡法として少しも是非する處なし、雖然、世渡法と道德と
 は其間に明晰なる區別を要す、若し之れを混同するときは大
 なる謬見に陥るものなり、身を殺して仁をなすと云ふ古の聖
 賢君子の行爲は、功利論者の眼より見るときは何等の意味な
 き事となる可し、何者、功利主義は古の利己主義、快樂説の
 缺點を輔ひたる迄にして、此の主義の内容は矢張り利己と快
 樂の範圍を脱せざればなり、孰れの動作も快樂は生物皆之を
 豫想す、人生の行爲として快不快の感情に支配せられざるも
 のなし、然れども快樂の情は吾人の生理的の稱達には必要なれ
 ども、道德的行爲に於ては快樂は適度の制限を要す、是れ快
 樂なるものは人をして邪道に導き腐敗墮落に陥れ易きもの
 なればなり、故に適度の制限存する處即ち道德存すと云はざ
 るべからず、依是觀之、功利主義は道德の根本主義として甚
 だ危険なるものなりと、加藤博士が功利説は到底人を善くな
 す能はずと自白せるが如き蓋し故なきことならず、然らば來
 るべき道德の根本主義として、吾人の探るべきもの果して何
 ぞや、道德は重に情的方面のものにして、單に經驗的認識を
 以て立する事能はず、若し經驗的認識のみを以て立するときは
 は功利主義快樂説の如きものとなり、未だ完全なりと云ふべ
 からず、認識は固く是れ現象界の事實にして科學研究の範圍
 に屬す、道德は情を以て立するが故に、心理學及び社會學等の

如くに單に科學として論ずべからざるものあり、何者、情は
 現象界を超絶して實在界に入るものなればなり、情とは何ぞ
 や、愉快惻隱の情是れなり、愉快惻隱の情は人皆先天的に之
 を有す、勿論經驗によりて發達すと雖、誰れか此の情を有せ
 ざるものあらん、此の情によりて吾人は道德を立す、此の情
 によりて吾人は動かさるものなり、凡そ道德の價値は全く
 此の情にあり、行爲の如きは抑も枝葉なり、此の情なきの動
 作は道德的行爲となすべからず然らずんば基督の行爲も、彼
 れと共に十字架に懸りし賊人の行爲も何ぞ撰所あらん、千
 載不滅の善行美德も全く此の愉快惻隱の情にあり、故に道德
 にありては之を以て尤も原本的なりとす、若しこの情を度外
 視したらんには、道德なるものは何等の意味なきものとなる
 べし、蓋し道德の問題は現象界を超絶して實在界の探究に依
 るべきものあり、即ち吾人は何をなすべきかの問題に對する
 解答は既に過去に屬す、來るべき道德問題としては、吾人は
 何故になさざるべからざるやの解答に遭遇せん、是れは勿
 論哲學を俟て後知るべきなり。

上來既に論述するが如く、宗教も道德と同じく重に情的方面
 に立つものにして、快して知的方面のみを以て立すべきもの
 にあらず、宗教は哲學にあらざ、固より宗教には哲學的方面
 あり、哲學は宗教を研究すと雖、哲學と宗教とは全然同一視
 すべきものにあらざるや論無し、宗教は科學にあらざ、科學
 は現象界の探究にして、宗教は根柢を深く實在界に置きて研
 究するにあり、故に吾人は現象界を探究する科學にては能く

吾人の精神的需要を満足する事能はず、哲學は現象實在の兩
 者に干係し、知的探究をなす丈け夫れ丈け宗教の如く重きを
 情的方面に置かざるを以て、哲學は博く人心を根柢より動か
 す事到底宗教に及ばず、故に哲學は自家の安心立命には可な
 るも、之を以て普ねく一切に施すと云ふ事能はず、よし之を
 施すと雖功を奏する事鮮少なり、今之を昔の歴史に徴する
 も社會の人心を動かし然かも功果あるは皆宗教的勢力なり、
 視よ、釋迦の如き、基督の如き、幾千年の今日も如何に偉大
 なる勢力を以て彼等が精神の猶ほ活動しつゝあるかを視よ、
 此の恐るべき勢力は彼等が宗教の哲學方面にあらざして情的
 方面にあるなり、今や物質文明は恰んぞ頂點に達すと雖、精
 神的文明は之に伴ふ事能はず、故に舊來の信仰を以てしては
 或は安心立命の途を見出し難き者あり、是れ來るべき新宗教
 のある所以也此の點に就ては吾人は此際最も慎重に尤も眞摯
 なる研究を要す、抑も吾人は必ずしも盲從的信仰を探らずと
 雖、一も二もなく舊來の信仰を排斥するものにあらず、何者、
 舊來の宗教は其完全は保し難きも眞理なきにあらず、佛教と
 云はず基督教と云はず、其他宗教として博く社會に行はるる
 處のものは、皆或る眞理を有す、彼れは厭世的なり、此れは
 迷信的なり形式的なりと、其欠點を擧げて而して其全斑を棄
 つるが如きは、恰も玉の光なきを見て之れ瓦礫なりとして棄
 つるが如し、愚も甚しからずや况んや、佛教は上下三千載の歴
 史を有して其開發達進化したる、時間的空間的に幾億の人心
 を支配しつゝあるに於てをや、若し此の如きの宗教を度外視

して、新たに信仰の基礎を作らんとするものならば、是れ木
 に竹を接ぐの愚にあらずんば砂上に家屋を造築するの危きを
 致すものなり、豈に思慮なかるべけんや、村上博士嘗て「新
 佛教」の巻頭に謂へらく吾人は舊を好む者にあらずして新を
 好むものなり、然し舊に依らざるの新は猶ほ樹木の根なきが
 如く、吾人の到底同意し能はざる處なり、古きを温ねて古きに
 泥むは舊宗教也、古きを温ねて古きに泥ます峻々乎として新
 しきを知るものは眞の宗教なりと、宣哉、吾人苟も第二十
 世紀の精神界に住して常に道德宗教の探究に従ふもの、沈思
 默考宜敷慎重の態度を探りて可なり、進取の氣象は最も嘉す
 べし然れども、輕卒なる舉動は管に己れを誤まるのみならず、
 他人をして不測の謬見に陥らしむる大罪なり、豈に慎まざる
 べけんや。

天下悉く小人也

安藤 鐵 腸

悉くといふと雖、一人も残らずといふ意には非ず、十中の八
 九、百中の八九十といふの意、而かも愚昧なる輿論、非道なる
 多數決に依て背倫沒徳の行爲を取てする今の世に於ては、僅
 少の有眼者ありと雖決して安心はならず、今にして此儘に打
 ち棄てんか、滔々たる惡風至る處に彌蔓し、遂に天下一人の道
 を談するの士なきに至らん、志士の憂ふべき問題ならずや、
 抑々個人は社會の一員にして、人類は共同生存の性質を有す
 るものなれば、凡そ人たる者は個人の生存を全らざる共に、
 社會の生存を計らざるべからず、而して社會の生存を計ると

いふは、之を大にしては社會全体の利益を計ることなれども、之を小にせば他の一個人の利益を計るに在り、若し一個人他人に迫害せられて生存を殆くせば、社會は幾分の力を減じたるなり、更に迫害の度強く、遂に死滅に歸せば、社會は遂に其の一員を失ひたるなり、然れども此の個人に減じたる力は他の個人に加わり、或は此に失ひたる個人は彼に得るが故に、社會より觀て畢竟實力の増減なき理なりと言はんか、大なる謬なり、社會は固く無情なるもの非ず、實力の計量上に損失なければ、個人の存亡に關せずといふが如きは物力以外、力なる者を解せざる、卑しむべき似而非物質學者の言のみ、予輩の力といふもの、豈何んぞ計算的、勘定的、十露盤の力あらんや、此の故に予輩は斷ず、人としての性格中第一に數ふべきは公共心に在り、若しこれなきものは人として資格を缺くものなり、俗に所謂人面獸心と賤しむ者則ち此の類を指せるか、

○今や天下の人悉く己の立脚地を過れり、又悉く己の天職を忘却せり、何ぞや、己れ社會中の一員たることを忘れ、人類は共同生存の目的を有するものたることを忘れ、而して又社會ありて己れも生存し得ることをも打忘れ、眼中見る所の者、只己のあるのみ、一意自己の利益に着眼し、其の利を争ふや、朋友も親族も、恩人も舊故もあらず、此の如くして富を得、位を得、榮達を得、以て人生の幸福を得たりとなす、世もまたこれを見て成功といひ、出世といひ、仕上げた人といふ、予輩より見る、此の人己の立場を過り、己の天職を忘る、事

る不幸福の人といわんのみ、然れども天下は悉く此の小人の群、事を律する概ね此の類、人を見る亦此の類、其の以て着實と稱し、堅固と讃し、確かな人、善く出来た人と褒めをやす人物の、多くは無爲無能、小膽怯懦、日夜戦々競々として、親譲りの株を失はざらんやうに、大事後生に墨守するの外は何事をも爲し得ざるイタダナシなるを見ても、其の一斑を知るに難からざらん、

○試に一青年ありとせん、生れて公共の心に富み、漸く長じて社會道義の腐敗を痛嘆し、夙夜東西に馳驅して家を顧るに違わらず、此の如きこと數年、家産漸く傾き、負債一身に集る、世人之を見て何の評をくだす、更に一青年あり、性敵黨不羈、事規矩に依らず、行準繩を離る、夙に大志を抱いて四方に流遇す、然れども志を得ずして家産を破り、流離困頓の身となる、世人之を評して何とか言ふ、極めて少數なる識者は知らず、十中の八九、百中の八九十は其の氣概、志望、人物を賞して、憾軻不遇の境に在るに同情の念を寄せ、一掬の涙を灑かんとはせず、却て其の流離落魄を指摘して宛かも悪事を犯したる者が當然牢獄に繋がるゝが如く言ひ做し、以て其の子、其の弟の將來を戒しむるの料となす、若し失れ小心翼々として大望を起さず、大義を履まず、公共の觀念はよし薄くとも、己れを利するに寸毫の抜け目なく、巧に貧緑の網を攀ぎて密かに人を排擠し、光風霽月などは大の禁物、二六時中せ、こまじき小刀細工に變身を變つさん者ども、今の世に御覺へ目出度き人にてあるなり、歌人縣居翁會て言へる

ことあり、「野邊の高草、岡の上の小草に及ばず、うは及ばざるに非ず、立ち所の低くければなり」と、人も亦然り、人たるの立場を過て、個人は社會の一員なることを忘れんか、如何なる智者才子と雖遂に小人たるを免れず、翁の言、以て今の世の箴となすべし、

社 會

英國女皇陛下の崩御

英國女皇陛下には去月十九日頃より、御病狀甚だ容易ならずして大に衰弱を來し、大體萎縮の兆候ありしが、二十一日に至り愈々危篤に瀕せられ、翌廿二日午後六時四十五分終に崩御あらせられたる旨の悲報に接せり、十全の君と雖も命數の盡くる所復た如何ともする能はざるなり、吾人は友邦の臣民として深く哀悼の情に堪へず、玆に謹て弔詞を呈し奉る

謹て案するに陛下の御降臨ましませしは一千八百十九年にして、本年八十有二の高齡に渡せられ、一千八百三十七年先帝ウイリアム王崩御により、皇位を繼承せられしより今年に至る迄正に六十五年、如斯は英國の歴史中絶えて其比を見ざる所にして、英國の國力益、振強し其文化の進歩せる、社會改善の遂行せられたる、寔に千古無比にしてこれ亦他の朝に其比を見ざる所なり、今や英國は杜國の事變未だ裁定に至らず、而して東洋に於ける北清の事局も未だ全く終結を告げざるに

早くも此凶報に接す、英國の不幸これより甚しきものならん、噫

京濱佛教徒大懇話會

新世紀を迎ふると共に、基督教徒は大舉傳道の看板を掲げて、將さに大に雄飛せむとす、之に反して佛教界獨り萎靡沈滯振はざるの感あるは、吾人の大に遺憾とする所なり、曩に印度僧徒救助を動機として成立したる、都下佛教主義の雜誌社が一同となりて、氣運の趣く所遂に本月十七日を期し京濱佛教徒の大懇話會を東京に開くの決議をなせり、嗚呼一の懇話會何事をか爲さんとするか、一點の火よく炎々として大厦高樓を燒燼するとせば、微々たる懇話會と雖も豈全く望みなしと云ふべけんや、少くとも教界の懶眠を警醒するを得んか、

暗黒なる東京市

政治機關の中心たる東京市何ぞそれ暗黒の甚しきや、由來政治は社會をして腐敗せしむるか、所謂政治家なるものは必ず墮落せざるは止まざらんとするか、堂々たる東京市會議員の醜行多きをみて、吾人聊か疑なき能はず、彼等は中流の財産を有し相當の名譽を擔ふもの、固より生活の困難を訴ふるものにあらず、而して東京市民は如斯醜類に常に市政を左右せらる、吾人の轉た寒心に堪へざる所なり、彼等今や法律の制裁

によりて獄に投せられんとするの機近きにあり、嗚呼此暗黒なる東京市を如何せん、吾人は於是乎内閣大臣の責任を問はんぞ欲す、

伊藤圭介翁逝く

本草學の大家として海外に迄名を轟かし、我學海に貢獻したる老理學博士伊藤圭介翁は今春九十九の高齡を重ねしが、去月二十一日溘然として逝去したり、翁の履歴は他の新聞紙競うて報道せり、蓋し翁の世に知られしは始めて蘭人シーボルトに會ひし時にて、彼も益し我も益したる事はシーボルトが後日の著書中にも見ゆたり、夫より尾張藩の藩醫となり典醫となり幕府の審書取調所に召さるゝに及びて名聲内外に聞ゆ、未だ曾て一度も洋行せずして雷名歐米に轟かしは其發見する所の藥草中多くイトウの名を附して學者の間にもてはやさるゝにても知らるべく功績の大なることまた窺ふに足れり、歐米の學者一度度翁の訃を聞かば其の哀惜の度は蓋し邦人に譲らざるべし、

眞宗各派同盟俱樂部
昨年十月京都の妙心寺において各宗派管長會議を開きたる際誠照寺派管長二條秀源師の發起にて眞宗各派同盟俱樂部を設置すべしと提議しその後各管長間に協議中なりしが今回この交渉纏り左の規約を決議したりといふ、

公徳問題

- 一、開宗立教の本旨に基き精神的結合により眞宗各派の一致を鞏固にして宗門本来の面目を發揮する事
 - 一、言行忠信の金言を恪守し富相、敬愛の教誡を遵奉し各派一致の實を擧げ佛教の責任を全うする事
 - 一、眞宗各派管長および役員を以て本俱樂部員とする事
- なほ右規約設定につき記名調印せし管長は左の如しまた來四月には各管長京都に會合して右俱樂部の發會式を舉行するよし、
- 眞宗大谷派管長大谷光榮、同高田派管長常盤井鏡、同興正寺派管長藤澤澤、佛光寺派管長遠谷妙空院、同出雲路派管長藤善、同山元派管長藤原、同誠心寺派管長二條秀源、同三門派管長平光圓
- 二十四、街燈を破壊する事
 - 二十五、雇人又は牛馬家畜を虐使すること
 - 二十六、會、俱樂部、政黨等の出金不納の事
 - 二十七、英國人の愛國心に當るること

教界彙報

- 二十八、信書の回答を等閑にすること
- 二十九、我國民の喧嘩を好む事
- 三十、我國の醫師が公徳を重むること
- 三十一、規則を守らざる事
- 三十二、遺失物を藏匿する不徳の事
- 三十三、英國兒童の謹慎なる事
- 三十四、御儀式に欠禮すること
- 三十五、宿屋にて隣室の客に氣兼ねせざる事
- 三十六、倫敦市民の深切あること
- 三十七、赤切符にて一、二等の車輛に乗ること
- 三十八、英國にて劇場眼鏡の紛失せざる事
- 三十九、我商人契約を守る念なきこと
- 四十、我商工業者に公徳心なきこと
- 四十一、官有物公共品を浪費すること
- 四十二、年の市に廢物を捌くこと
- 四十三、我國にて學者も公徳を重むること
- 四十四、公共備品を竊取すること
- 四十五、學生試験に狡猾を行ふこと
- 四十六、書籍を借りて返さざる事
- 四十七、天長節の夜會に食器紛失の事
- 四十八、會場の徳義を守らざる事

文學士植村定造氏は高等學校在學中より佛門に歸依し一年志願兵として近衛歩兵隊に入營後は道心益々堅く出營後兩親の許可を得て去月十五日釋宗演師の徒弟となりて得度式を行へり▲釋迦佛骨は既に京都に著し居るが尙其の一部を東京に遷さんとの議各宗に起り愈々來る三月中旬を以て東京に遷す事に確定し上野公園博物館前の廣地に祠堂を建築し之に安置することに決定したりと▲去る廿六日正午より淺草本願寺に於て月島丸遭難者吊慰演說會を開き、南條文雄、村上專精、清澤滿之等諸氏の演說ありたる筈、▲東本願寺にては來る四月十日より二週出、分派三百年の大法會を修行し、且つ瞻仰御影の開扉をも執行する筈にて夫々門末に向て諭達したりと云ふ▲今回新に起りし東亞佛教會にては、布教第一着の手段として錦輝館を譲受るとに契約整へりと▲兼ねて本誌に報道せし眞宗大學の建築工事は其後非常に捗り取り、落成の期日も近きにありと、されど他に何か都合ありと見え、京都よりの移轉は九月の學年初にして、それ迄は圖書館并に圖書閱覽室をも設けるとになれりと▲新年に入りて「家庭」「精神界」の二雜誌生れ出たり、教界の爲め資すべき事なり▲東本願寺に關係ある東京大谷會にては、布教の爲め且つ會員使利の爲め俱樂部を設立せんと議一決し、調査委員數名を擧げて萬事を托せりと云ふ委しき事は追て記すべし▲佛教青年會幹事眞岡地海氏は

會務を帯びて京都に出張せり、本月上旬歸京の筈、

以古爲鏡 可三以知興替
以人爲鏡 可三以明得失

信 界

何ぞ心主を求めざる

興地 觀圓

吾人日常の談柄に上つて居る事柄を取て考て見るに十中八九は他人の噂で持切て居るソチテ彼の善を云ふことを欲せずして陰ながら其缺點を指摘し批難するを以て尤も快事として居るのである誠に淺間敷ことではないか元來此の如く人の悪しき噂をなし快なりとして居るのは必竟人に善人たれ孝子たれ忠僕たれと強ひて己れの不善と不孝と不忠とを不問に置いて居るに外ならぬのである西哲の語にも知者は一切を自身に求め愚者は一切を他人に求むとある故に知者には憂慮多く愚者には心配が少ないのである

たることを左程悪しきこと、は思ふて居らぬものが往々ある甚たしきに至ては此等の犯罪を以て自己等に恰好の職業なりと考へて居る考へて居る計りではないわれ等が商賈は拘摸なり窃盜なりと公言して憚らない從て監獄署へ來ることは恰も商人が商業上の損害を蒙りたと同様に思ふて居る短期の刑罰に處せらるれば案外輕少なる損として其僥倖を喜び長年の入獄は之を大損害なりとあきらめて敢て甚た苦とせぬもの、如しである眞個に淺間しいではないか我等に若し良心が活動せず又健全なる人格を保つて居らぬならば我等も亦此の如き事を平氣で爲して居るかも知れぬが幸にも我等には微か乍ら良心が働いて居て人格に異變がないから彼等を見ては之を憐み之を恐れ之を導くの念が起り又己れ此の如き墮落の境遇にあらざりしを喜ぶの心も起る

陰約の内には随分やつて居ることがある餘程立派な人に成たと思ふ心の下から他人にも話せない不潔至極の心が頭をもたげ來るではないか罪人を誨へて居りながら彼等にも劣らぬ程卑屈な心が胸に充つて居ることがあるではないか乞食を嘲弄して居りながら補乞根性は我等の行爲を支配することがあるではないか我等はよくよくこゝに注意反省せねばならぬ所謂修養の工夫を積み修徳の苦心をなす所はこゝにあるのである有名なベンヤン氏さへ此の點に於て非常に苦悶した餘犬猫を見て羨んだことである現んや余輩に於てをや若し然らずして後に他人の身上を非議して居るのは狂人が狂人を笑ひ乞食が乞食を嘲り又監獄に於て詐欺者が窃盜犯者をさげしめ窃盜犯者が強盜犯者を愚物視しつゝあると一般なり

心主を早く立つるとである心主とは何か阿彌陀如來是也蓮如聖人は「彌陀ヲタノハ南無阿彌陀佛ノ主ニナルナリ南無阿彌陀佛ノ主ニ成ルト云フハ信心ヲウルコトナリ云々又當流ノ眞實ノ寶ト云フハ南無阿彌陀佛コレ一念ノ信心ナリ」と仰せられたが之を眞面から伺へば信する一念に御佛は即ち我等を攝取し玉ふて我等の心を支配して下さる、主となり玉ふのである先覺の佛心凡心一體になるとの教訓はこれである實に有難い惡と汚を以て充ちて居る我等凡夫の心が知恵慈悲圓滿の佛佛の御心と一體になるのである我等の力ではない御佛の御力で一體にして下さるのである即ち今迄は至て不健全の心をたよりとして居た我等がこゝに初めて確然不動の心主を仰いたので此迄曇り勝ちなる我等の良心は晴明のものとなり我等の人格も益々確實になつて來るのである茲に至て我等は明闇に依て言行を一二にするともなければ又世の恐ろしさ罪惡に墮落することもない蓋し我等の一言一行は主の御命令に待ちて起るからである昔者許魯齋なる人曾て暑中に河安を過ぎた渴すると甚し時に路傍に梨樹があつた同伴の衆人皆見て争ひ走りて取て之を啖ふたが魯齋は獨り樹の傍に危坐して平然として顧みない或人怪で其故を問ふた魯齋答て曰く其有に非ずして之を取るは非道である或人笑て曰く世亂れて梨に主はない公猶取らぬかと魯齋然として曰くソナナつたらぬことを謂ふ勿れ梨に主がなく共吾心に主があるとハツキ云ふたこのことである實に面白いこれが我等の活模範である

吾心の主とは即ち吾心と融合して下されて居る佛心である
樂を断せざるものは、則ち名けて苦さず、樂を断するを以ての故に則ち苦
るとなし、苦樂なきは乃ち大樂。

令 蒼

新山吹譚

甲 南 生

七重八重花は咲けども山吹の
みの一つだになきぞかなしき

こは洩れく人口に膾炙したる國風にして、誰しも一度は耳
目に觸れ給ひしところならん或は繪畫の美しきにもせられ
て好箇の畫題となり、或は勸學の手びきとして修身書の好題
目となりさては狂言詩語のたぐひにまで、いと面白くかき載
せられ、あはれ黄金の色麗かなる可憐の花は、英風漂々たる戰
國武士の面影と共に、長へに士女の語り草とはなりにき、陽春
三月梅花地に委して、櫻花未だ枝頭に上らざるの時、賤ケ伏
屋の籬のあたり、清き小川の歌唄ひつゝ、流るゝ汀、緑色
濃き菖蒲に映りて美しく咲きいづる可憐の花は、道灌の名に
因みていよゝ、其色の立まさる心地せられ、鬼將殿めしき
戰國武士、斬つはに閑なく、朝には戰塵に塗れて彼處の柵
に戦ひ、夕には此處の城を攻めて矢石の間に往來し、血雨に
淋し凄風に浴し鍛へに鍛へたる荒くれ武者、扇谷の上杉家に

又なき弓取と人にも知られたる道灌の風手は、不語の花を俵
ちて更に無限の詩趣を覺えしむ、由來武夫の優美なるばかり
美はしきは父とわらじ、

されどこの詩的なる物語は、まこと根もなき作り話にして、
何時の頃如何なる人の作りしにや定かならねど、道灌の事蹟
として、こよなき誤なりけり、後の世の小説家などの手に懸
造せられし根無草のあまりに面白く、詩味の津々たるより、
かくは洩れく人の口にも傳へられ、つひに山吹の里なごへ
る古跡さへころ出で來にけれ、いでやまことの道灌を描きて
多趣多様なる彼が生涯を語らんかな、

太田道灌は相模の人、父は資清と呼び扇ヶ谷上杉持朝が家宰
にして、法名を道真と號し官は、備中守に任じ、武藏國都築郡
太田の郷の地頭職を務め、關東屈指の兵者、文武兼備の良將な
りけり、若年の昔より文に心を掛け、道灌を以て政道を助け、
武を以て逆賊を治めければ關東の將士皆爭ふて其旗下に屬
せんとし、草木の風に靡くが如きものありしといふ、願ふに
道灌の智略と、將た其文と、之を其父に稟くる所蓋し、鮮
少なざりしなり、

道灌は永享四年を以て呱呱の聲を相州扇ヶ谷の邸に舉げぬ、
幼名を鶴千代と呼びしが、長ずるに及び、持朝召して親ら元
服を加へ、詩の一字を授けて持資と名のらしむ、後資長と改
む道灌は實に其號なり、資性極めて穎敏、鳳雛の名風に噴
々として四隣に喧傳せられしといふ、年甫めて九才にして席
序に入り學を習ふ十一歳の頃に及びては、早く既に屬文の法

是等の逸話未だ必らずしも、悉く信すべきに非ずとせざるも、
彼が絶群の才氣を持して、凌上の風ありしは掩ふべからざる
の事實なりといふを得べし、是れ偶々彼が長處にして、同時
に短處なりしところ、這般傲慢不遜の性情は彼が五十有五年
の一生涯を通じて隨所に顯然たるものあり、

享徳二年正月持資年廿二にして從五位に叙せられ、翌々康正
二年家を嗣ぎて扇ヶ谷の家宰となり、大小の政務に參與す、
全年十二月五位下に昇進し、備中守に任じ左衛門大夫と稱
す、此時彼は武州品川の岩に在り、良城を築きて以て重鎮の
地を定めんとし、遂に千代田、寶田、齋田三村の地を相檢し、
工を康正二年に興し、翌長祿元年四月を以て造營の効を終る、
時に年廿五なり、因て五山の學僧材菴、蕭菴等をして詩を賦
し銘を撰せしめ、東軒を名けて靜勝軒と呼び、西軒を含雲軒
と名づく、是れ蓋し杜詩中の句窓、含西嶺千秋雪、門
東吳萬里船より命名せし所なり、彼れ自ら歌ふて曰く

我宿は松原のいさ海近く

軒端に富士の高峯をぞ見る

と眼を前面に放てば品海浪靜かにして白鷗眠濃かなる所、
白沙の渚汀灣曲面白く磯なれ松の緑と相映じ、漁家點綴其
間を縫ふものあり、翻て後方の天を望めば芙蓉の峻峯屹如
碧瑠璃を貫きて聳立するものあり、幽邃の景閑雅の致萃まり
て雙眸の中にあるものは是れ實に江戸城の風光なりとす、彼が
居をこの勝域に占める所以のもの一はこの地が關東の要鎮な
りしによると雖も、又一は風月烟霞の佳僻ある彼が、この

を誦し、文を作りて父道真に示せしといふ、十二歳の春庠序
を出でし嚴父の膝下に薰育せらるゝの身となり、日夜文武の
兩道を研磨し、長ずるに及びて彼が非凡の英才は益々其光輝
を發揚するに至りぬ、されど白尊の念強きものは往々にして
驕慢に流れ易く、彼も漸く己れの才智を恃みて長上を凌ぐ
に至り、不遜の行爲ははしなくも口悪なき隣人の口の端に上
るに至りぬ、父道真深く愛兒の前途を憂ひ、夙夜此惡風を矯
正せんとし訓誡頗る力む、しかも尙往々にして奇智を弄して
慈父を苦しめしといふ、道真嘗て誡めて曰く、容貌魁偉才智
鋭敏にして膽大なるもの古來禍無きは少し、今兒が居常爲す
所を見るに言行放縱に過ぐるものあり、今の時に於て能く慎
誠する所なくんば奇禍忽ちにして其身を亡ぼさん、之を物に
譬ふるに障子の如し、曲なれば則ち倒れ、直なれば即ち立つ
と、持資黙して立ち、傍にありし屏風を掲げ來りて曰く直な
れば則ち倒れ曲なれば則ち立つ如何と、道真言ふ所を知らず、
佛然座を立ちて亦言はざりしといふ、道真又嘗て自ら驕者不
久の四字を誓し持資を召して其意を問ふ、持資聲に應じて曰
く、願はくば兒之に一字を加ふるを得んと、進んで不の一字
を驕者の上に冠す、蓋し驕らざる者も又久しからざるを意味
するなり、道真赫怒扇を採て之を打ちしことありしといふ、
年少氣銳の彼が傲慢不遜なる、嚴父に對して尙且つ是の如き
ものありしなり、嗚呼子を知る者は親に加かす、道真の訓
誡果して他年の識をなし、彼をして遂に庸主定正の毒手に斃
れしむるに至る、慎むべきはげに増慢の心なるかな

や感慨無量、自から過ぎにし昔を追懐して、同情の感甚だ切なり乃ち獨り此語を反覆して曰く、嗚呼永久不滅の信仰に非ずんば到底又我を慰むること能はずと

人其境遇を同じくすれば語る所多く相同じく、遭遇する所甚類似す、同年の人、同郷の人、同位の人、同職の人、彼等互に相親しむは固より其所也、然れども彼等必しも衷心同情の念切なるものに非ず、獨り同境の人、交り未だ深からず、信する所必しも同じからず、學ぶ所又相異なるものありと雖、時に際して花、涙を澀ぐの情、骨肉の間に異ならざるものあり、一面の舊識なきの人と雖、予、時として其愛を聞くや之が爲に走らんと欲し、其不幸を知るや之が爲に慰むる所あらんと欲す。

言ふを止めよ汝は是厭世悲觀の人なりと、人生五十年一度は其慈親と分けざるべからず、其兄弟と離れざるべからず、其妻子と別れざるべからず、或者嘗て曰く人其父に分るれば必ず其性格を變ずと、子として親を思ふの情、よし其性格を變せざるも其腦裡に至大の印象を刻すべきや必せり、一代の歴史は確に此時に於て一線を劃すべければなり、知らず此最後の袂別に際して爾は尙冷然として笑ふことを得べきか、抑、爾は何を以て爾の悲哀を慰めんと欲するか、爾は何を與へ又何を遺さんと欲するか、我が聞かんと欲する所は此時に於ける爾の信仰なり、人生は喜劇に始り悲劇に終るものなり、而して此最後の一幕閉ぢんとする時再び光明の世界に入るべきか、將た又闇黒の世界を現すべきかは、演劇者も傍觀者も共

に須らく顧慮すべきの問題なり、我心は公明正大なり、我心は至誠を旨とし俯仰天地に耻づることなし、我は本來自信の強きものなり、我意見は人より勝れたりと思ひ、我主義は人よりも善きものなりと思ひ、我が財産、我體力は人よりも貧しく人よりも弱しといへども我學問、我事業は一步も人に譲らざるべしと信せり、然れども我最後の問題は哲學、科學、論理を以て遂に解釋すること能はず、唯、一切智の指導する所に任せり、一切智とは何ぞや即佛陀是なり。

我が有限の生命に永久不滅の活力を與へたる者は佛陀なり、我が健全なる時、我を勵まし、我を鼓舞するものは佛陀なり、我が病める時我を慰め、我を勞はる者は佛陀なり、我に勇氣を與へ、我に熱心を與へ、我に生命を與ふる者は佛陀なり、佛陀は實に我最初の救済者にして又最後の慰問者たるなり、宗教は實に人心の奥底に存する最深の感情なり、容易に捕捉し得べくして容易に捕捉し得べからず、其一度逸するに當りてや多く斷常の二見に陥り、又空觀に墮落す

宗教は又實に人をして大智見を開悟せしむる最後の斷案なり、然れども大智門は制して開くことなく、大悲門は開きて遮るとなし、ターレス以後二千年間の哲學史は皆此智門を開かんが爲に努力せし痕跡なり、彼等の努力は歴々として見るべきも、其最後に到達せし眞理は、其當時の最高精神を表はすに過ぎず、箇々の小宇宙をして各、其自性に適合する世界觀人世觀をなさしめよ、學術と經驗が齎す所の結果は人間進歩の歴史たるのみにして其最後の證信より顧みれば、凡て

の經驗的認識は極めて微少な價値を存するものに非るか、否其効力は實に偉大なるべし、十年前の經驗と今日の經驗とは我に於て雲泥の差あるを見は誰か學術と經驗に對して其價値を認めざるものあらんや、唯夫れ最後の證信に對すれば之に先だつものは皆微弱なる光りを放つと、恰も彼の中夜燈々たる星辰が曉天の日光に對して漸く其光りを失はんとするに類せんのみ

然れども智門は堅く閉ぢて容易に開かず、所謂知識より來るべき最後の證信は必しも不滅の信仰ならず、必しも人生の闇黒を照すべき光明たらず、又必しも苦しみを救はんとする慰問の宗教たらず、苦みの淵を出でんが爲には先づ佛陀の大悲を見よ、

闇黒を照さんが爲には先づ攝取の光明を見よ、宗祖嘗て曰く「煩惱に眼さへられて攝取の光明見されども大悲ものうきとなくて常に我身を照すなり」と、大悲門は此の如く其門戸を開きて我等を入るゝに吝ならず、我等先づ此門に入て不滅の信仰を得たり、

信仰を稱するに智見を開くといは、即智と稱せよ、其歡喜報恩の念躍々として起るを見て、其感謝の情に名くるには感情なりといは、即しかく稱せよ、決定的意志の強固なるを見て其不動の念に名くるには是れ意志の力なりといは、即又此の如く稱するも敢て不可ならず、「名は是れ響きのみ、煙りのみ」、名目は余輩の問ふ所に非ず、宗教的精神は、吾人が全幅の精神を傾注するの時常に其片影を顯現すべし、ヘエゲルは嘗

て謂へらく宇宙の神秘秘密は思想の權力に對して抗拒する力を有せず、思想の前には宇宙は其豊富深遠なる秘奥を吾人の眼前に示現し以て吾人を樂ましめ、自から其門戸を開かざるべからずと知識は此の如く一切の秘奥を開き、之が解釋をみんとす、然れども、翻て人生を見る、學は廣くして生命は短、宇宙の秘密開かんと欲して開く能はず、天地の寓意、解かんと欲して解くと能はず、二十八年の春秋を重ねるも依然として尙當年の阿蒙、ファウスト開卷第一葉の語を誦して曰く

「嗚呼我の如き憐むべき愚物よ」

思を主觀的考察に耽らし、心を世界觀に馳する時は宇宙の我あり、我の宇宙あり、氣宇宙大の感自ら之に伴う、去て思を客觀的事相にめぐらし、心を人生觀に轉する時、却て「ボエチウス」が哲學慰問論に一滴の涙なきこと能はず、嗚呼狡兎死して良狗烹らる、ネローの爲に死せしセネカの最期を見よ、アントニヌスの爲に倒れしパピニアースを見よ、威權熾々たる榮華の夢醒めて、一度其位地を代うるや、彼等は皆罪なくして非命の終りを遂げしにあらざるや、とは此の如き同一の境遇に陥りたる「ボエチウス」が「チシム」の牢獄にありて記する所、人生の未來茫乎として其榮枯盛衰の圖るべからざる此の如し、此朦朧たる前途を照すものは、常住不變の燈火に非んば頼むに足らず、何ぞ又智眼の開きを嘆せん、大悲門に入て直に慈眼の彌陀を見、其秘鍵を探て大智門を開かば不滅の信仰は此に成立すべし

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

全 一 冊
寸 珍 美 本
紙 數 百 頁 餘

●特別減價一部金十二錢但郵稅共●郵券代用一割増の事

本書は著者曩に一九〇九政教紙上に掲げ、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、吾人人生の大問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ。清澤師本書に序して曰く、宗教は人心をして其根帯を自覺せしむるものあり、信仰は即ち其自覺あり、社會にして宗教を欠くは、其發展の一大要素を欠くなり、個人にして信仰の立たざるは、未だ其根本的不明を斷ぜざるあり、吾人の從來する所如何、吾人の趣向する所如何、吾人の價值は如何、吾人の運命は如何、凡此等吾人々生の最大問題は、一として最後の信仰に繫屬せざるものあることなし、宗教的自覺の世道人心に必要なること論を待たざるなり、(畧)近時宗教を喚呼する聲の甚大にして信仰を告白する説の甚盛なる如きは皆以て徴とするに足る、近角君の如きは最早此聲にきき、最早此告白を試みたる一人なり、(畧)これ固より君が信仰の餘瀝に過ぎざるもの、未だ以て君が信仰の全般を盡す能はずと雖も、君が如何に宗教を觀取し、如何に之を實驗し、如何に之を玩味せるかは、此數篇の間に於て之を瞥見し得べきが如し云々

注意 本書は前金にあらざれば送本せず●十部以上割引す
照會は必ず往復はがきに限る事 ●「政教時報」と別會計なるを以て雜誌代の中より差引すると堅く御斷の事
●着金の順序によりて直に送本す

發行所

●東京本郷森川町一番地

大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十一年十二月二十一日(即信省第三種郵便物認可)
明治三十四年二月一日發行(毎月一回)一月十五日發行

政教時報第四十八號